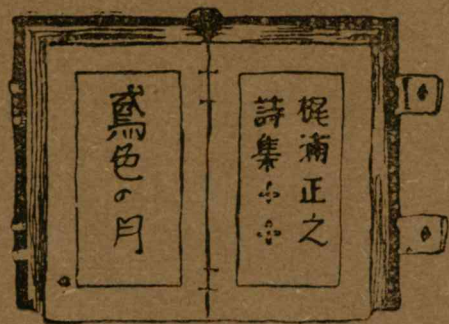




鳥の色月
惟浦正之
詩集
小



西曆一千九百二十五年

初版

東京
曙光詩社

序

君のお家の楠の木を單に樹木として眺めるには勿體ない。
張り廻した注連繩がなくとも、世にいふ神木とはああいふ
木のことでせう。

幾抱もある巨大な幹は幾十丈も地下へ根を張つて居るで
あらう。私はその下に立ち、安靜な心の數分間が過ぎると
私はその威風に震へて一種の恐怖を感じた。もしや君の好
きな燻銀を流した夜の空の下で鳶色の月がその枝に懸る有

様が私が眺めたならば、私はどんな避けることの出来ない感情に撃たれるであらうかを想像した。

君のお家はこの神木を守護する禮拜堂である。廣い廣い君の家の座敷に坐つて、遙かな隅から沸るお釜の音を聞く、私は動かない海原の上に坐禪して遮るものない空間の味を嘗めて居るかのやうに感じた。如何にも「鳶色の思想」が拔足差足で遺つて來る靜寂な境地である。

ここで君は情緒と叡智の護摩を焚く美の修道者である。然し——君に君の禮拜堂の戸を開ける時が來るかも知れない。君は間も無く象徴を捨てて現實を追ふ時が來るかも知れない。

知れない。其時には私は君と入れ替つて、君のお庭の楠の木に凭れ、君のお家の廣い廣い座敷に坐つて、昔のやうに再び感情の護摩を焚いて「鳶色の思想」を焼くであらう。さうして君の詩集は私に修道者の戒律を教へるであらう。

大正十三年十二月

野口米次郎

序

梶浦正之君は古く私の主宰してゐた詩社の人で「現代詩歌」「炬火」の誌上に於て既にその作に接してゐたのである。

「鳶色の月」は君の最近の詩作を蒐めて一卷としたものでこの詩集に於て君は急速の轉向と進歩をその詩の上に成し遂げてゐるやうに見える、勿論この轉向は更に第二の轉向を生む階段であるかも知れぬ、そしてそれがいつも詩にこつての新しい展開であるなら私は喜んでその成果に俟たう

。ただ君は處女の如き内省の心と、夢の如き想像の帷を透してこの現實を一つの新しい感覺の繪畫と音樂とに創造しようとしてゐる唯一の詩人であることを思はしめる。若きものにとつてこの世の現實は何ものでもない。「夢みるもの」が「在るもの」でありたいことを詩人の願ひである、私たちは青春に於けるこの唯一の權利を時にわけもなく捨てたがる。然しそれはまた何といふ間違つたことであらう、若し一生を夢みることに代へたシエラール・ド・ネルブルのやうな、悲しみながらも想像することによつてのみ人生を生きえたエルレエヌのやうな詩人が吾々の世界に

かつて一度も出現しなかつたごしたら吾々はどんなに詩の世界の寂寞を嘆くことだらう。夢と想像によつて擴大する世界があつて人は現實の桎梏にまつはる一切の夢魔から逃れうる、眞實は時としてあまりに弱々しく見えるものだ。絶え入るやうな哀曲の終句コトバにも似た陰影をなつかしみるる詩人を私は喜ぶ。

この詩集の詩は時に夢と感覺との粉黛濃きに過ぎるものあるかもしれぬ、しかし私は甘んじて自己の聲音にきき惚るる樂人の心をもつてこの著者の若やかにも純な心に對してそれを責めることを止めよう。

大正十三年十二月

川路柳虹

目次

鳶色の月

幽	暗	孤	想念に訪れる黎明	寥	鳶
邃	緑	獨	に訪れる黎明	苑	色
：	耽	な	：	秘	の
：	窗	蛹	：	語	月
：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：
元	六	三	一〇	六	三

墜ちたる星辰 …… 二〇
 紅葉 …… 三
 秋の音づれ …… 二四

枯淡な典雅

冬の薄暮 …… 元
 静かなる情緒 …… 三
 内在思慕 …… 三
 憂鬱なる眞晝 …… 七
 霧の朝 …… 元

寂しい騒擾 …… 四一
 古い言葉 …… 四

絢爛なる神秘

蒼白き夜の記憶 …… 四
 LE PAPILLON …… 五
 あまりに感ぜ的なる …… 五
 風の夜 …… 六
 山莊の一夜 …… 七
 曇れる朝の夢 …… 九

詩集 鳶色の月

跋	序	序
:	:	:
:	:	:
:	:	:
:	:	:
:	:	:
:	:	:
著	川	野
	路	口
	柳	米
者	虹	次
		郎

装
幀

KAME
IWAO

鳶
色
の
月

鳶色の月

裏庭のかた隅

無花果の木影

破れ瓦のうすだかく積まれたせびや色の地面、

幽暗な空氣が香のやうに漂ふところ。

私はたまらなく無花果の葉をこのむ、

ざらざらとした、ふあつならしや紙のやうな葉、

そしてそのどす黝い緑のいろは

何といふ慕はしい落着きを思はせることぞ。

物象を靜觀して、これが喚起したる幻想の裡
自ら心象の飛揚する時は「歌」成る。

——ステファンヌ・マラルメ

ばさりばさりゆらぐ、その心よい葉音に
うつとりと聞き入るとき、

湯上りの肉體のぬくみはいつか失はれて

枯淡な木製のやうな感覺到沈む……。

大いなる木炭の塊のやうな

はるかの屋並のうへに、

はりつめた燻銀の夕空よ、

それは明らかに天體の寂びた饗宴である。

青苔の陰翳^{かげ}から、仄暗い幹の空洞^{うつつ}から、

ごんな小さな蟻が、虫が、

この時の微妙なる恍惚を享^うけてゐることぞ……。

いつか微風に送られて

ぼんやりと鳶色の月が浮むだ。

友よ、

われは私の胸の室^{むろ}に、いつの頃からか巢^ねふ

幽邃にして絢爛なる

眠れる鳶色の思想の象である……。

寥苑秘語

秋深き隣は何をする人ぞ
——芭蕉

6

- A もはや黄昏……
かなた築山の背に月のぼるけはひ……
B いつしらす宵闇が黒絹の面紗して
大楠の根方から隠びよる……
C 青苔の夢まどふ燈籠に灯を入れやうか。
B かなた錆びうるむ暗緑の水中、
色褪せた燐鯉の肌の動く古池のほとり……

7

- C ささやかなる三つの墩石に憩はう……○
A 庭下駄の音を静めよ、うすい記憶の消えぬやう……○
B 濡れうるむ眸に残る遠き眞珠の夢、橄欖の夢……
A かまえて棄てよ、はかなき夢ごこ
ただあるは味きなき悔恨のみ……○
B さても貪婪りし花の數々は……
C しばしまてよ、零れとぶ草の實の多きは……
A 哀れ、醜草の繁みに唸る蚊の群……
B 今宵、燻る肉體の秘奥より光るは何ぞ……
C 喚びかける孤獨に還る靈の龕燈……○
夢みる指に栞された芭蕉の句集……

- 今ぞ語れ、あわ床しい東洋の叡智を、
- A 氤氳と搖曳する紫の薫香の如くにも……。
- B はてなき妄念の汎濫の裡、
- C ほのかなる憂鬱は訪ふ、黒繪のごと……。
- A ああ築山の背に月がのぼる……
- B 枯れ鳶の唐草模様あらぎえすくに降りかかる銀の點線。
- C 泉水の生籬に動くは蟾蜍か、
- A 風寥寥と吹き出て木立音なく顫ふ魚のごと……
- B われら三人佝僂みたりくぐせの如くにも俯き
- A 漂ふ沈黙しじまの言葉を聴かう……。

附言 之の詩は純和風の庭園を背景として「東洋的叡智」
 “La sagessa orientale”を仄かに顯示しやうと
 して tenson 型の表現を試みたものである。

想念に訪れる黎明

黎明だ、

爽やかに臆をあけて

蓮の蕾の開く音を聴かう。

昨夜のなつかしい記憶よ、

しばし忘却せよ、

ちからなく光るらむぶの焰と緒に……。

10

11

——溺れる者にとつて慧さかしい手法は夢であると
うす暗い欄間から、

軟かい曲線を顛はせて歌麿の美女は囁いた。

——すぐる日の舵ナビキユヤをどごめざるべからずと

額縁の中から、

エルレーヌの朦朧たる瞳は喃なごやいた。

空気が仄かな音楽のやうに擴がり

ふたつの聲なき言葉は香のやうに私に纏つた。

——沈黙しじまを愛する者は孤獨と握手することは

あわ何たる痛ましき箴言ぞ、

私はしづかに胸に答へた、

——愛するものの裡に自らを見出せよ。

昨夜のなつかしい記憶よ、

しばし忘却せよ、

ちからなく光るらむふの焰と緒に……。

黎明だ、

爽やかに牕をあけて

蓮の蕾の開く音を聴かう。

孤獨な蛹

その長いものうい眠りは何時からはじまつたのか。

ここは塵埃と騒音との渦巻く都會の

とある屋上庭園の一隅、

もはや蝕ばむだ黄色の葉をつけた

鉢植のひよろひよろの椽きぢの梢に、

私の長いものうい眠りは何時からはじまつたのか。

私はうとうとと遠い遠い記憶の影繪を夢みた——
 どんなに美しい夜、
 都會の官能の灯を慕つて飛んで來た蛾があつたか。
 どんなに蒸し暑い日に、
 あの埃つばい暗緑の葉を美味く喰べた毛虫があつたか。
 どんなに寂しい未明に、
 この厚つばたい絹張の殻が造られたのか。

今宵、あまりに月光がするどく

皮膚はだにしみいるので

しづかに夢からさめ、

ふしぎに魅するやうな思念にあくがれて

惱なやしく軀みもたえ軀みもたえる……

ああ、わたしは

肉色大理石まおびるの敷床の上に

ころころと轉まろび墜おちる

孤獨かちゆうな褐色の蛹であつた。

暗緑耽窓

L'ame et la chair

16

青葉が惱ましく窓に繁つて
この部屋もややくらくなつた。

お前は帯の隙ひまから手鏡をとり出し
そつとおのが顔に見入る。

私は壁に長い影を曳きながら

17

静かな都會の幻を描く。

なつかしい沈黙しじまがしばらく
香のやうにあたりに擴がる。

お前は鏡に映るその顔を
生きたるものと信じてよい。

私は壁に曳く長い影に
ひとつの生命いのちの宿るのを信じてよい。

青葉が惱ましく窓に繁つて

この部屋もややくらくなつた。

幽 邃

網代の扉に褐色の蛾は翅を閉じ、

水色のふえいるした戀人の顔のやうな

岐卓提灯の瞬きに眠りを催し、

皮坐褥の冷やかな感觸に瞳をつむるとき

はるかに「時」のしづかなる流れが聞える。

墜ちたる星辰

ほうけた菌のやうに暗い銀杏の

參差としてさしかはした蛇形の梢の奥に

HOFU.....HOFU.....HOFU.....

梟は菱形の軀をふるひながらなく。

かかる夜、

かかる處に、

空の一角から星辰が墜ちてくるのだ。

20

21

人は寂しく

その滑らかに苔むした根本に墜ちてゐる

天體の靜謐なる思想の碎片を採ふのだ。

紅 葉

蝸牛のあゆみはいづくにか消えた……。

蝸牛かたつむりのあゆみはいづくにか消えた……。

幽暗な追憶の匂ひのゆらゆらたちのぼる

くろぐろと淀みしづむ古池を凝視みつめ、

ひからびた落葉をさらさらと採みすてながら、

友よ、あの笹鳴きの聲を聴け

ひとつ葉の根もとから熊笹の繁みへと

紙切れのやうに素早くこぶ

あのちちつちつといふ鋭い短い叫びを……。

もえあがる紅葉の緋の肩衣をまとひ

大蛇おろちのやうにうねる老楠の幹に、

いつか夕靄が幽玄な思想の巢をかけた……。

秋の音づれ

苔むした大楠の肌をしめらして
しとしと細い雨がふる……。

房毛も色あせた御簾過しに

妹は無心に琴を弾く……

その幽玄なひびきに聴き入りながら

私は机上に「埃及建築史」の一卷を閉じた。

青銅の水桶になだれかかる

萩のうねりに白い蕾が點せられた。

風もない、戀もない、夢もない

へんに澄みゆくひとつの寂しさがあるばかり……。

秋だ、

秋だ、

もうそろそろ私の思索の觸手も

外象へゆらゆらと出る頃だ、

蒼黝い水底から浮びあがる水泡のやうに……。

枯淡な典雅

Listen again One evening at the Close
Of Ramazan, ere the better Moon arose,
In that old Fakir's Shop I stood alone
With the clay Population round in Rows,
—Omar. Khayyam

冬の薄暮

もはや日は暮れ、風は死に、
遠くの町のごよめきも消えた。
白ろちやけた樹々は裸形のやうに立ち並び、
渴れたちよろちよろ川にかかる石橋は
抱いた真晝ひるの温味を奪はれ顛えてゐる……。

しづかに大松の幹に倚りかかり
ひからびた褐色かしろうの鱗皮うろこをめくれば、

それは古典な思想の言葉のやうに
からからと音たてて落ちる……。

(何處かで死に後れた蠅の翅はたきがする……)

散りしく落葉の中の蟋蟀の死骸に

死の面影のおのきをしのぶのもいらぬ、

過ぎし日の色褪せた戀を想ふのもいらぬ、

ただこの枯淡な寂しさに身をまかせ

鉛のやうな冷えかかる重たい空氣を吸ひ

うす濁る薄暮時の林間を泳ぎながら

ああ私は、盲ひた魚のやうに

そつと空の明るみをうかがふ……。

静かなる情緒

Thou, silent form, dost tease as out of thought
As doth eternity; Cold Pastoral!
— John Keats

蒼然と煙る庭前は

午さがりの陽が亂れ交はした楓の梢を漏れて

苔むす飛石に金粉をまきちらす。

草雲雀は幼ない日の幻想をかなでながら……。

羊齒^た類のじめじめの掌にかこまれた

奇石峨々たる泉水の空洞^{うらう}の中から

蟾蜍は陰惨な黒水晶の瞳をひからす……。

恍惚を通りこした寂しい情景である。

沈黙^{しじま}に浮ぶ忘我の影を追ふ

ここは茶の間、

一座に漲る聲なき鬱幽のめろでい……。

そよ風にかすかにゆらぐ簾^{すずり}過しに

大廣間のとりとめのない空虚の侘しさが

あまりにもあきらかに私の瞳孔をゆすぶる。

さびはてた褐色^{かちいろ}の夢みる床の間には

枯淡な濃緑の唐南天の

そのばさばさの葉と石灰の花の點々と……。

黄色人の軽い愁の顔いろの

この静寂に敷きつめた畳の

織目の漣に漂ふ玻璃製の菓子器ひとつ。

並べる沈黙の客人よ、

ひとすじに立ち昇る香爐の青きころよ、

私はいと静かなる情緒を望むで

いま、膝まへに供せられた薄茶の

ふつくらと泡だつた緑をのみほさう……。

内在思慕

しろちやけた衣をぬぎすてぬぎすて

ほそぼそと消えゆく炭火に

銀鐘は低い聲音で喚びかける。

綻びかけた梅の蕾を振ぎながら、うつとりと

わたしは猫のやうに圓ろい花瓶を撫てゐる。

友よ、占へる骨牌を棄てよ、

わたしのさぶしい視線を過ぎるものは

もも色の鸚哥が歌ふ幸のはあとにあらす、

また、魔物くる夜の怪星に似たすべいにあらず、
あるは、ただ仄暗い氣分の湖水に棹さす
しみじみとした「寂寥の驚異」のみ……。

ふはりふはりと衰たげの紫煙をくゆらせば、

夜は死にゆく獸のやうに幽かに呼吸しかけた。

占へる骨牌を棄てて

友よ、ただ聴け、

わが心象の林にふりつもる雪のしげきところを……。

憂鬱なる眞晝

瞳まなこをつむれば、

蝕くばむだ冬の陽の

ごろんとした黄ろい焰を感じる眞晝である。

眼鏡の曇をぬぐひながら

はるかに海鳴りの音をきく……。

身に受けた傷なら癒えもしよう、

けれど心に滲むだ戀人の入身いれづみをなんとしよう。

枯草の軟かい纖毛に抱かれ

かるく啞えた飴色のばいふに

紫の煙をゆらゆらくゆらせても、

ぎびぎびな神經の齒車はまだ廻つてゐる。

ああ、またも翳りゆく雲止の鉛……。

霧の朝

乳色の霧が夢のやうにたちこめてゐる、

ここはうらがれた大川端の朝。

はるかにかかる鐵橋は莚藪のやうに軟かくふるえ、

くされかかつた菌むれの簇は向ふ堤の松並であるか、

しろ天鵝絨の中空に

ぼうと朧ろな大量をひろげた月は朝日であるか。

私は丈なす枯蘆の中をがさがさどわけてゆく、

私は巨人の頭髮の中を歩いてゆく。

あわ、それは
 失はれた愛戀の匂を搜めて、
 さふしく嗅覺をこがらせながら
 がさがさと霧の蘆間を
 さまよひゆく
 いつびきの飢えた瘦犬の姿でもあるか。

寂しい騷擾

へんに重くるしく覆ひかぶさる曇天に
 黄ろい顔の風船がひとつゆらゆらと昇つてゆけば、
 群衆は仰いで冷たい笑ひをする。
 女が金魚のやうに嬋妍やかな鱗をなびかせて
 群衆の波間を消えてゆけば
 群衆は指さして低くささやきあふ。
 なんといふ寂しい騷擾だ。

それは倦み疲れた民族の祭でもあるか。
 または古い古い傳統の錆びた反映でもあるか。

ゆゑしらす、はてしなく、

憂鬱なる思想をひそかに孕みながら

群衆はぞろぞろとうねつてゆく……。

古い言葉

丸牕に繁る樵ギナの木立を透して

白雲は駱駝の群のやうに流れ

静けさは針の落ちる音までも聴えさうな晝……。

金泥も寂びた古典詩集ポエジッククラシクの黒革をなでながら

私は愛する、古い言葉を、

貧しい記憶の瘦野かげろに遊絲カゲロウの如く搖曳する古い言葉を。

嗟乎、

危い危い炎歿わきばいの日は嘗てあつた。

その驕傲な時代の呪文は

古い言葉を葬らうとした。

その昂奮した時代の瞳は

古い言葉を晦冥な表象とした。

過ぎ去つた言葉は死んではゐない

古い言葉は書物の中に眠つてゐる。

わたし達の敬虔な時代の祈禱は

古い言葉を蘇へらせよう。

わたし達の静かな時代の瞳は

古い言葉を洞察し讚美しよう。

過ぎ去つた言葉は死んではゐない。

私は愛する、古い言葉を、

貧しい記憶の瘦野に遊絲かぎりの如く搖曳する古い言葉を。

それは靈を圍繞してささやに呼吸してゐる、

その埋葬の歌はいつ聽えるか。

絢爛なる神祕

自然は即ち辭書にして
想像は即ち人間なり
而して追憶は理想を創造す。

——エミール・ベルナール

蒼白き夜の記憶

友よ、

花粉の饗宴に爛れた想念の扉を出で
暈に絡む華かな虹彩をこすりながら
海底の廢園の如く蒼ふくれた野面を
あてどなくふらふらと徘徊ひゆかう……。

つつましく出揃つた稻の頭をなでる
素絹の風の流れに、

しづかなる野の聲よ、
 幽かに圓味をおびたせろの唸りであれ……。
 うちふるふ瑪瑙の空の一角から、
 星は泛る、電光のやうに
 巨象の如く眠る森影へと……。

友よ、

この蒼白い野の透明の器うつはに
 なみなみと盛られた感傷の液に
 のたうち溺れようとする意志の悶えを見よ。

友よ、

草葉に煌めく露玉に濡れしよばれ
 家路にしづしづと歸らうとするとき
 ふたたび蒼白い野をふりかへり見よ、
 はるか東ひがしの涯に
 むらむらと立ち並ぶ入雲道の底下そしたに
 大都會の灯の點點と瞬くを……。

LE PAPIILLON

のがれし蝶のいのちよ、
わが手の残粉をはらはむとせば
ま赤き夕焼の川面かはらをに
あが魂はまろびゆく……。

あまりに感覚的な

月光がしきりに扉をのつくするので
ねむられぬままに窓を開けた。

鬱蒼と繁つた灌木のもとから、
むつちりとふとつた茶色の犬が
陰險な瞳をきよろきよろさせ
とぎすました刃のやうな青いれいゝを
しろい舌でべろべろとなめてゐるのだ。

天は、まぶしく耀きみてる透明な、いや、もんだである。
地は、ごす黝い光を放つ半透明の黒耀石である。

このふたつの角あまたある寶石が

いま、ぎちぎちと痛ましくも摩擦してゐるのだ。

ああ、この鋭く互え渡る風景に

私の感覚はたえられないのだ。

誰か来てくれ！

誰か来てくれ！

はげしい叫び聲は大河にこだまして、

ますますこの風景を互えさすばかり……。

感覚のめすが

あやふく觀念の心臟を抉らうとするとき、

さひはひにも私は軟かい追憶の扉をしめた。

そして、とごめなく流れ出る涙が

うすい帳さばりをしづかに下して、

私の視覚からこの風景を髣髴とさせた。

風の夜

おお風の夜である、

幻の灯をつけた

長いながい瀛車は

夢の大蛇おろちのやう

遠いどほい

桃の林をうねつてゆく……

おお、

わたしの魂を曳いてゆく。

山莊の一夜

いちめんに熊笹はごす騒い波をうねらし、

椽こちのしげみは岩石のやうにをちこちにちらばり、

うす絹の白雲から飛びくるは

月光の白金しろがねの刃やいば……○

友よ、

なつかしい静寂の幽霊がどこにゐるのだ、

しづけさは凄味をおびて

寂しさは怖れどかはる……○

ふけゆく夜の山莊は

蒼海にただよふ一つの黒船でもあるか。

はるかにつらなる松林の間から

斷層の赤い肌がちらちらのぞく……。

友よ、

もう床に入らう、

そして潮しほのやうにおしせまる蟲の音に

過ぎし日の戀でも語りあはふか……。

——一九二三、九、八事山にて

曇れる朝の夢

——ニジンスキイの舞踊を夢みて

どんなに寂しい聲もしない

曇れる新緑の夏の朝。

なごやかな空気はながれながれ、

霞める玻璃窓に螢は光りを秘かきめた。

私は願つてゐる、いましばらく

彼女の快活な瞳の開かないのを。

ああ、この朽ちた朱塗のBALCONY

いとなめる白蟻の巢はぼろぼろとこぼれ、

驕れる思想の風景は

しづかにしづかに曇れる朝の意識を過ぎる……。

かかるとき、

はるかに眠れる竹林の葉影に

艶めける靈魂の揺曳を感じた。

惱める黄昏

新月、

新月、

ああわが心はいま切に新月の光りを求める。

茜色の夕陽が蛭蝓なめくじのやうに机を爬ふとき

花瓶の白萩のほろほろと散るとき

電車の軋りが魂に喰ひ入るとき……

壊れかかる象牙の塔を撫でながら
陶器師すえろしの如くうつむく私は

遙かなる世界の光をうかがふ……。

澄める心象

Nos sens n'aperçoivent rien d'extrême.

—Pascal

澄める心象

まづしい私の詩境に、

いま望むものはバスカルの玲瓏の叡智。

大地の底に横はる水脈の静かな情熱。

おだやかに自然を驚異しよう

揺籃ゆりかごに眼覺めた嬰兒みどりこのやうに……。

あまりの響は吾らを尊殺する、

あまりの光りは吾らを眩惑する。

しづかな心ですべてをながめよう

あるがままを正しく見抜くために……。

心の窓を通じて星は花束に見え、

華やかな理想は空間を飾る虹に見える。

しとやかにしとやかに湧きあがる

創造の詩境は

あるがままの實在の力強い骨組に

ふつくらと豊かな想像の肉づけをする……。

(嘗の日、叫むだ空虚な怒號が聞える、

名曲にきき惚れてゐる者を脅かす半鐘のやうに……)

嗟乎、

心象こころさうの扉を開けよう、

それは外へ攻撃の觸手を擴げるためでない。

新鮮な空氣を内へ内へと吸ひ込むために。

自分の詩集の汎く讀まれる日

白絹の覆をつけた電燈は

噴霧器のやうに軟かい光を投げる……。

傍らの鉢植の護謨の樹の

厚い暗緑の葉裏に碧い蟲がこまつてゐる。

あざやかな葉脈は青銅の浮彫のやうで

その影は古代騎士が振翳した楯を想はせた……。

冷えかかるここを啜りながら

ふと私の心は寂しい譬喩を描き出した。

民衆は強烈な色彩の變化を好む

けれど彼等は同色配合の美を知らない、

民衆は華かな光を意識する

けれど彼等はそれに伴ふ影の美を知らない、

嗟呼、わたしは

自分の詩集の汎く讀まれる日のあまりに遠きを思つた。

懷疑はむしろ美しい

すばやい機會の鑰はいつくにか失はれた。

叩けども、

叩けども、

はてしない空虚な反響ばかりで

ほの暗い懷疑の扉は開きはしない。

嘗ての日、

愛犬のつづらな瞳を通じて

71

紅く結むだ乙女の唇を通じて

小鳥の低い鳴き聲を通じて

火星のはるかに投げかける赤光を通じて

私は言ひしれぬふしぎな懷疑を覘つた……。

蟲の音もおどろえた今宵、

ほの光る黒檀の机に倚りかかり

晩秋おそあきのすみまさる沈黙しじまにひたり

じつと手を組むで落着けば

私にとつて

懷疑はむしろ美しい空想の鳥だ。

時の流れ否匂の流れに

ヨネ・ノケチ氏に

たまには優しい薄紫の野菊もあり

また赫く燃える情熱のダリヤもあるけれど

そこいらは一面に密生した叢です。

私は夢中になつてその草路を辿りながら

たえず彼の沈着の泉を求めてゐます。

72

かのとらへがたき時の流は

73

いつ頃、何處どこからはじまつて

また何處へやつてゆくのか？

私は信じます、

かのとらへがたき時の流みなもとの源には

はるかなはるかな未知ふえひるの面紗めんさした花園があり、

其處には

馥郁たる甘やかな恍惚の花、悪臭を放つ毒の花、

または

かの爽快な健康の花、憂鬱な孤獨の花……

その他いろいろの花の簇むらが咲き満ちてゐると。

かの遙かなはるかな未知の面紗まへぬらした花園からの
 とらへがたき時の流れ、否
 とらへがたき匂の流れに
 歡樂、苦痛、悲哀、寂寥……
 そうしたいろいろの匂におひを味ひながら
 私はこの密生した叢くさむらを辿つてゆくのです。
 だから、たえずかの床しい沈着の泉を求めてゐます。

人生

お嬢さん、

人間は地上に生棲する動物の一種だそうです。

地球の表面には空氣が濃密に漂ふてゐるといふのは
 蛋白質たんぱくに輝く人間の精液が

大洪水のやうに瀰漫してゐるのではないでせうか。

理想とかいふ圓周上の極點を求めて、

のろい舞鼠のやうに

一步一步地球を後へ推しやりながら

あへぎあへぎ進むのが
人間の「歩み」ださうです。

月が出ました、

お嬢さん、

琥珀色の夕空に、破りたての卵のやうな月が……

あれが感情の蒸溜水を地上へ、

涙のやうに涙のやうにふりかける奴ですね。

たしかその優しい怪物の別名を

野蠻な情熱の濾過器とかいひましたつけね……。

寂しく笑ひましたね、

お嬢さん、

でもそれが人生ではないでせうか。

青瞳回夢

海濱の憂愁

君は黄卵色の海水まんごうを纏ひ
松林の夕暮を歸つていつた。

私は潮かれた岩根に倚りかかった、
萎みかかる草花のやうに……。

もはや暮れ方の海原は
巨人の胸のやうに落つて來た。

The Flower that once has blown for ever dies.
——Kunikida

軟かい曲線を描く乳色の海岸、
くちた杣に匍ひのぼる小蟹の腫、

はるかな防波堤にだけかかる
憂鬱な波の泡沫がきこえる。

君は黄卵色の海水まんごうを纏ひ
松林の夕暮を歸つていつた。

私は寂びかかる思想の微光を感じた、
遠く仄かな白い幻の葩のやうな……。

新 月

色あせたかあてんに戯れる風もなく、
熟れた林檎の酢っぽい核は
えなめるの小皿にこまごまこのこされた。

妹よ、

またも慧しい翡翠の腫で

わたしの心象の哀しい龜裂を覗くのをおよし……。

ふたりは田舎の仄暗いかふえの二階で
ふしぎにうづくまるけだものやうに
あたたかいこゝあをうつむいてすする……。

遠い疎林に青い新月がほそぼそどのぼつた。

自畫像

亂れ咲く萩からの風があまりに寒い、
妹よ、

雪灯に燭ひを入れてくれ

さびしい自畫像に夕闇が迫る……。

ふたつの美しい瞳の湖水よ、

かつての日、

あかあかと燃ゆる夕焼雲をうつし

郷愁になびく白雲のちぎれをうつし

かりそめの嵐に波立つた湖面は今澄んでゐる。

軟かい睫毛は碧玉の湖岸につづくアスバラガスの林であるか。

おを白の額は弓なりにふくらむ月夜の地球で、

さびしく燃える地熱は

それでも輝かしい健康の幸ある華を咲かす。

こころからの接吻くちづけの甘い暖かさも味はない唇は

幻滅の風吹く虚無の暗い墓穴にのぼつてゆく

肉色まゝあぶるの「生」と「戀」との二つの階段であるか。

萌黄の天鵝絨にかがやく鼻は、

若き母のかひなに抱かれて朧月をあふいた

追憶のなつかしい芝生の丘でもあるか。

ひからびた梨地の頬よ、

もういちど、あのつやつやしい林檎色にかへつてくれないか。

うるはしくたちならぶ深緑の頭髮よ、

いつまでもいつまでも豊満な果樹園の姿であつてくれ、

そして、あこがれる健康の牧歌を漂はしてくれ。

亂れ咲く萩からの風があまりに寒い、

妹よ、

雪灯に燭ひを入れてくれ

さびしい自畫像に夕闇が迫る……。

夜の園生

Le souvenir avec le Crepuscule

— P. Verlainé

愛人よ、

その破れし萩の柴折戸しかりやを開けて

わが園生そのかに歩みをはこべよ。

おぐらい樹影の青苔の上に

はやも蟋蟀、づいつちよは鳴きいだし

大楠の梢に鐘撞蟲のひびきもきこえ
 その薄闇を螢が淡い灯をつけて縫ふてゆく……
 黒衣を纏ふた園生そのかは老ひた修道女のやうに
 そと蒼白の面紗かえりを頂にかぶる。

愛人よ、

水朽ちた古池の傍に、
 その過去かみの日の歡たのしい追憶おとひてを
 昔ながらの唄に聴かう。

涼しい夜氣をはこぶ軟い風に
 おひ茂る楓の木立の奥から

ほのかにも流れる石燈籠の灯……
 色くろい奴隸のやうに並んだ棕櫚の
 鋭い葉先にこぼれかかる星の點點……

愛人よ、

この模糊たる沈黙しじまの靄をとほして
 そつと握手しよう。

冬の夜

— 或は幻の Relief —

流し眼にみる丸窓に、
冷たい水銀の夜空は重たくたれ
星の瞬きは死魚の瞳のやうに鈍い……。

鋪びうるむ鐵色の壁に影法師はうごかず、
くろすみ光る海松うみまつのばいふに火はいつか消えた、
さつきの幽かな地震にばらばらとちつた

92

93

床の間の白菊はなびらの葩の骨ぐみ……。

銀の腕時計は、

西歴一九二三年十二月三日午後十一時半を低く囁く……。

今宵、

私のさぶしい妄想の觸手は
まぼろしのささやかな鑿と錘とをふるつて
白樺の幹のやうに黄ろく軟かい追憶の胸盤に
藪影に開く水仙に似た昔の戀人の像を
しづかにこちこちと浮彫ウキウキするのだ。
ああ、明くて淡い愁ひの漂ふその顔を……。

初秋の對話

(輕きユーモラス)

(松の幹から蟬の脱殻がからりと落ちる、草雲雀のセンチメンタルなすすりなきが聞える……)

——ごんなに環境の壓迫が激しいからつて、あんなに速く心が變る女とは思はなかつた

——リゴレットでも道化て歌ひたまへ、風の中の羽根ぢあないか

——瞬間の美とでも云ふやつだつたね、近頃流星や花火

94

95

のやうな戀^{ラブ}が流行るから……

——でも田舎祭の雑沓の日に杉垣の多い道を寺院の方へ歩いて行つた光彩陸離たる村一番のスタイルは素適だつたね

——所謂健康美人の田舎娘の群衆の中では傲慢な孔雀^{クイーン}か女王のやうに見えたのも無理ないね、結局、美なんか譬喩と比較と相對の問題だ

——ところで君はあの女に未練はあるかね

——もちろんあるさ、しかし異性に對する未練だよ、男が女に覺える寂しさだよ……

——だが君は當時、幻滅の悲哀てな感を抱いてゐたぢあないか

——まわ、坊つちやんの心の湖へ飛び込んだ蛙の波紋位
のものだね、淡い青春日記の半頁さ……

(松の幹から蟬の脱殻がからりと落ちる、草雲雀のセン
チメンタルなすすりなきが聞える……)

旋律禮讚

—ANNA PAVLOVA—

序 曲

うるはしのきはみよ
ああこのたまゆらを
われらかんがふるをえず
ひたすらにおほれむのみ

はるかに繁れる菩提樹の梢から
ごんな白羽の天使えんせつが抛げたのか、

明るいあかるい幻覺の草の實が

大いなる銀盤へ限りなく零れかかるこ

なやましい褪紅色の觸手は

銀粉を散らした緞子の黒幕のまごから

蛸足のやう、うねりうねり

青苔のやうな觀客の神經をつかみかかり、

びかの玲瓏たる快調につれ

ふしぎなる白銀の曲線はもつれもつれて

あまやかな香放つ踊子をかたちづくる……。

跳る、

跳る、

あわ羽根なき鳥人は跳る

踊る、

踊る、

あんな・ばぶろわ、

綺羅びやかなていらんの星の夢、

白雪皚皚たるしべりやの月夜、

萌黄の脚光が

すかああこの軟い波動を撫でかかれれば

幽かに眠れる音波は高まりたかまり

ついに碧海の波濤と轟き

赤—青—紫—緑—黄—

忽ち閃光は踊子の
 貴蛋白石輝く緑髪になだれかかり
 すべては官能の都のごとく狂亂して
 あらゆる華やかな夢を織りなす
 恍惚の萬華鏡どかはる……。

そこ方あるせろの鈍い一絃が唸れば
 かぎりなく織りなせる色彩は消えうせ、
 いつさいは鮮やかな瑠璃光の園となり
 やがて狂へる曲線の踊子は
 蒼白い悔恨の月に背を向ける乙女のやうに
 夕闇に折れた裸木のやうに、

さびしくくの字にうなだれしづみ
 鋭い直線美の姿勢に遷る……

ああ、

あんな・ばぶろわ、

綺羅びやかなていらんの星の夢。

白雪皚皚たるしべりの月夜。

跋

圓らかな搖籃の夢から覺めて遙かなる夕空に月の暈を仰いだ幼いけ
なき頃よりして、薄い影の如く、軽い病の如く私の心に纏つた一つ
の氣分があつた……その後専念詩道に精進するやうになつてから
最早八年に近い年月は流れた。その間、幼稚極まる處女詩集と小曲
集との價値なき二つのみ、いらを殘して來た。今此處に「鶯色の月」
一卷を可成の自信を以て世に送り出すの欣びを持つ。

尾張平野の一角、青苔、草庵、古池、石燈籠、琴の音、茶の湯、香

爐——それら純和風の句豊かな家庭に育つた私が、典雅高貴なる享樂と幽遠靜謐なる神秘を好み、Omar Khayyamを讀み、芭蕉を誦し、Tagoreを味ふは必然的の現象であらう。併し現實界の苦痛を嘗めた私は過去に於て此の實在に可成の幻滅を感じた、けれど未だ彼の「エルレーヌの如く“O mon Dieu, j'ai connu que tout est vil”」と言ひ切る勇氣のない程度にこの實在にある寂しい思慕の念を抱いてゐる。

風景を詠づる時、彼の輕薄粗雜なる公園ベンチ、並木アーカ燈式幻想曲こそあれ、幽玄なる純和風特有の庭園を背景とした詩を全く生ずして抒情時代を終る日本詩を私は哀れむ。彼の Louis Bertrand の “Gaspard de la Nuit” にしろ Paul Fort の “Pont au Change” に

しろ、その特有の風景が分泌する處の觀念が如何に多くの讀者を魅するかを想ふとき私は飽く迄も日本庭園を背景として所謂東方的叡智 “La sagesse orientale” を仄かに顯示しやうと試みたのである。

人あつて私の詩篇に「現實味」の歛漏を詰責するあれば、それを私は受容する。尠くとも此の詩集一卷に於ては。而して私は何等羞恥を感じない（自己の藝術的信念に照らして）。併しながら私は「現實味の歛漏」に満足してゐるものではない。私は未だ若い、此等先づ内在の完成を俟つて然る後外部へ進まう。此の「鶯色の月」の觀念を以て以後現實を歌はうと思ふ。その結果は當然未來の詩集に示さう。

古典傳統の美妙境を敢て私は棄てない。畢意するに自らの信念の

可糧を體得して然る後、徐徐と外部へと推し展げ進みたい。「物の味をみづからなめて、しれるごとく、いにしへの雅言みな、おのがはらの内の物としなれば、一うたのこまかなる心ばえの、こよなくたしかにえらるることぞおほきぞかし」と古今和歌集に序せる本居宣長の言葉は私にとつて至言である。

寂び淀む古池の邊り、暗緑の無花果の繁み、その上遙かに張りつめた燦銀の夕空のいと静かなる饗宴にのぼる鳶色の月こそ、まさに幽邃にして絢爛なる眠れる鳶色の思想の象徴である。あくがるる豊かな情緒の世界にささやかな叡智の鑿をふるふ浮彫の美こそ、この詩集の中樞をなすものである。

本詩集を出版するにあたり、同郷の先輩野口米次郎氏 わが師
川路柳虹氏の序文をいただいたことを深く感謝いたします。

尾張楓月庵にて

大正拾參年師走

著者

詩集

鳶色の月

畢



◀ 月の色 鷺 ▶

發行所

東京市牛込區神樂町一ノ十二

曙 光 詩 社

振替東京三七七七二番

著 者 梶 浦 正 之

大正十四年一月廿五日印刷
大正十四年二月一日發行

「定價壹圓貳拾錢」

印刷所

伊東印刷部

——同じ著者によりて——

處女詩集

餓る惱む群

一九二一年版

小曲集

砂丘の夢

一九二四年版

第二詩集

鳶色の月

一九二五年版

譯詩集

タゴール詩集

近刊

評論集

泰西詩人傳

近刊

